

『ファウスト』 雑感 VI

—契約—

Notizen über “Faust” 6

—Pakt—

漆 谷 克 秀

Katsuhide Urushidani

6. 契約

21世紀に入って少し過ぎた頃、つまり、50歳代を半ばにして、わたしはファウストの一つの言葉が気になりだした。それは、メフィストフェレスが契約を結ぶため、二度目にファウストの書斎 (STUDIERZIMMER) を訪れたときの言葉である。

Ich bin zu alt, um nur zu spielen,
Zu jung, um ohne Wunsch zu sein. (1546-7,S.53)

ただ遊ぶだけには、年を取り過ぎた、
望みもなく生きるには、若すぎる。

「老い」を感じ始めた言質であろう。このような言葉をメフィストフェレスが見逃すはずはない。「老い」を感じながらも、「若さ」も捨てきれないこのような時期には、悪魔の誘惑に抗しきれず、その陥穽に陥ることがある。

では、どのような場において、この言葉が発せられたのであろうか。少し遡って考えてみる。

復活祭を過ごし、ファウストはむく犬 (Pudel) をつれて書斎に入る。そのむく犬がメフィストフェレスであった。自己紹介をし合い、歓談したあと、メフィストフェレスが帰ろうとするときに、なぜかグズグズしている。出入り口の床に描き刻まれた魔除けのペンタグラム (Pentagramma) が邪魔になっているのだ。むく犬として入ってきたときは、気付かずに一部の磨り減った部分から入ってきたらしい。ファウストは、窓や他の扉や煙突もあり、出て行けるではないか、と言って不思議に思うのである。

MEPH. 's ist ein Gesetz der Teufel und Gespenster:

Wo sie hereingeschlüpft, da müssen sie hinaus.

Das erste steht uns frei, beim zweiten sind wir Knechte.

FAUST. Die Hölle selbst hat ihre Rechte?

Das find' ich gut, da ließe sich ein Pakt,

Und sicher wohl, mit euch, ihr Herren, schließen? (1410-15, S.49)

メフィスト. 悪魔や幽霊にも掟があるんです、
入り込んだところから抜け出なきゃならんのです。

最初は許されても、二度目ならもう下僕だ。

ファウスト. 地獄でも法があるのか？

それは良いことだ、そうなれば、契約を

安心して、君たち紳士諸君、君たちと結べそうだな？

悪魔は律儀だ。契約を結べば、契約者に対し、約束を違えることはない。ただ、周りの人々には危害が及び、それには責任をとらない。ファウストは、悪魔と契約を結んでもよいような感觸を得ている。ここでは、悪魔を捕まえたと喜んだのだが、眠らされて逃げられてしまう。悪魔を手玉にとることなど、人間にはできないようだ。

次の場も「書齋」で、メフィストフェレスが再びファウストを訪ねてくる。金の縁取りをした赤い服を着て、パリッとした絹のマントを羽織り、帽子には鳥の羽、先の長い尖る剣を佩する「高貴なユンカー」(edler Junker)の出で立ちで現れたのである。そしてファウストに、世間のしがらみから解放されて自由に人生を体験すれば、と誘う。それに応えて、ファウストが言う台詞に先の言葉がある。

FAUST. In jedem Kleide werd' ich wohl die Pein
Des engen Erdelebens fühlen,
Ich bin zu alt, um nur zu spielen,
Zu jung, um ohne Wunsch zu sein.
Was kann die Welt mir wohl gewähren?
Entbehren sollst du! sollst entbehren!
Das ist der ewige Gesang,
Der jedem an die Ohren klingt,
Den, unser ganzes Leben lang,
Uns heiser jede Stunde singt. (1544-53, S.53)

ファウスト. どんな服装をしても、おれはきっと、
狭苦しい地上の生活に苦痛を感じるだろう。
ただ遊ぶだけには、年を取り過ぎた、
望みもなく生きるには、若すぎる。
何をこの世界はおれに与えてくれるというのだ？
なしで済ませろ！ 耐えるのだ！
これが、誰の耳にも響いてくる、
おれたちが生きている間ずっと、
おれたちにしわがれ声で刻々と歌い続ける、
永遠の歌なのだ。

おそらく、願っていること (Wunsch) の十に一つでも叶えられれば、人生に「イエス」と言えよう。しかし、起きてから寝るときまで思いどおりにもならず、「だめだ！」とか「我慢しろ！」と日常に追いまくられていたら、どのような思いを抱くであろうか。ただ時刻を告げるだけの日常に、齢を重ねている、とファウストは考えている。日常とはそのようなも

のだが、ただ生きているだけというのは、つらいものなのだ。学問に幻滅を抱きながらも、胸の内には、知的好奇心と知ろうとする意欲が湧き上がっているのを、ファウストは認めている。その意欲は大きすぎて、己にはどうすることもできないディレンマにもがいている。さらにこのファウストの台詞は続いていく。

Der Gott, der mir im Busen wohnt,
Kann tief mein Innerstes erregen;
Der über allen meinen Kräften thront,
Er kann nach außen nichts bewegen;
Und so ist mir das Dasein eine Last,
Der Tod erwünscht, das Leben mir verhaßt. (1566-71, S.53)

おれの胸の内に棲む神は、
深くおれの心の奥底を刺激しやがる、
やつは、おれのあらゆる力の上に君臨しているのに、
外に向かっては何も動かそうともしない。
そう、おれには生きていることが重荷だ。
死が望ましい、生はおれには厭わしい。

この神は、宗教と関係はない。「万有」を知ろうとする意欲で、胸の内にあって、知的好奇心を掻き立てる。それなのに、「知ろう」と行動を起こせば、この神は、もう動きも見せなくなる。自己を発現する行為を実行できないでいる。そして、ファウストは、「死」を口にする。それに対して、メフィストフェレスは「でもね、死が歓迎された客であったためしがない」(Und doch ist nie der Tod ein ganz willkommner Gast)(1572, S.53)と言って、復活祭の前夜、ファウストが毒杯をあおごうとして止めたことを仄めかす。このあと、ファウストは人生の一切を呪うのである。

FAUST.

Fluch sei dem Balsamsaft der Trauben!
Fluch jener höchsten Liebeshuld!
Fluch sei der Hoffnung! Fluch dem Glauben,
Und Fluch vor allen der Geduld! (1603-06, S.54)

葡萄の香ばしい液体を呪う！
あの最高の愛の寵愛を呪う！
希望を呪う！ 信仰を呪う、

そしてなによりも、この人生の忍耐を呪う！

人生を呪う言葉が連なっている。引用したのは、最後の箇所である。ファウストのこの呪いの激しさには、逆に、「生きる」ことへの執念にも似た意志の力と強烈な個性を感じさせるのだ。そして、安逸な日常へといつも誘おうとする自分をも見てもいる。しかし、メフィストフェレスにとっては、そんなこと、ただの戯言にすぎない。

MEPHISTOPHELES.

Hör auf, mit deinem Gram zu spielen,
Der, wie ein Geier, dir am Leben frißt;
Die schlechteste Gesellschaft läßt dich fühlen,
Daß du ein Mensch mit Menschen bist. (1635-38, S.55)

悲嘆をもてあそぶのはやめなさい、
それは、ハゲタカのように、あなたの命をむしばむ。
最悪の連中だって、あなたに思い知らせてくれますよ、
あなたは、人間とともにあつての人間だ、ということ。

メフィストフェレスの名言の一つであろう。ファウストも、人生に対し、呪いを口にするたび、それが自分に跳ね返ってくるのを感じている。呪いが命をむしばむのである。人間は多分に社会性をもった生物で、いかに「孤独」を吹聴してまわったところで、他の人間との接触を避けることはできない。ときにして、それが鬱陶しくも面倒くさくもあるが、「人間とともにある」こと、それが「人間」であることを示す。また、“Mensch”に不定冠詞が付されていることに留意しなければならない。このあとすぐに、契約のことが話し合われる。

メフィストは、この世でファウストの道連れとなり、懸命に仕えるといい、ファウストはその代償は何か、と問うのである。

MEPH. Ich will mich **hier** zu deinem Dienst verbinden,

Auf deinen Wink nicht rasten und nicht ruhn;
Wenn wir uns **drübn** wiederfinden,
So sollst du mir das gleiche tun.

FAUST. Das Drübn kann mich wenig kümmern,

Schlägst du erst diese Welt zu Trümmern,
Die andre mag darnach entstehn.
Aus dieser Erde quillen meine Freuden,
Und diese Sonne scheint meinen Leiden;

Kann ich mich erst von ihnen scheiden,
Dann mag, was will und kann, geschehn.
Davon will ich nichts weiter hören,
Ob man auch künftig haßt und liebt,
Und ob es auch in jenen Sphären
Ein Oben oder Unten gibt. (1656-70, S.56)

メフィスト. わたしはこの世であなたの召使いとしての義務を負うつもりです。

あなたの指示であれば、片時も休むこともないでしょう。

もしあの世で、わたしたちが再び出会いましたら、
あなたはわたしに同じことをしてくれればいいのです。

ファウスト. あの世のことなどに、おれはかかわりたくもない。

おまえが、この世界を粉々に打ち砕いた初めて、
別の世界がそのあと生じてくるだけのことだ。

この大地からおれの喜びがわき出る、
そしてこの太陽がおれの苦しみを照らすのだ。

おれがこの大地と太陽から分かたれるとしたら、
そのときには、望むものでもできるものでも、起こるがままになればよい。

未来にもまた、憎しみ合うとか愛し合うとか、
あちらの世にもまた、

上があるとか下があるとか、

そんなこと、おれはもう何も聞きたくもない。

「この世」(hier)では、ファウストはメフィストを不断に使えるのだが、「あの世」(drüben)で再会したら、ファウストはメフィストの意のままになる、というのが契約の内容である。「あの世」とはもちろん「地獄」を指す。悪魔と結託した者は「天国」に救済されるはずはなく、当時は、焚刑によって、その魂魄さえも滅するものとされている。しかし、ファウストは「あの世」に対してまったく関心がない。喜びも痛みも「この世」にあつてのものであり、死後の未来になにが生起しようとも、心が引かれることも、視線を向けることもない、とメフィストに言う。つまり、この世の生き方こそ問題なのである。それならばなおさら契約するように勧め、メフィストは「まだどの人間も見たことのないものを、あなたにお見せしましょう」(Ich gebe dir, was noch kein Mensch gesehn.)(1674, S.56)と言って、ファウストを誘惑する。

それに応じてファウストは、「あわれな悪魔よ、おまえは何を見せてくれるのだ？ / 崇高な努力をしている人間の精神が / おまえのようなものに分かったとでもいうのか？」(Was willst du armer Teufel geben? / Ward eines Menschen Geist, in seinem hohen Sterben, /

Von deinesgleichen je gefaßt?)(1674-6, S.56) という。ファウストは崇高な努力の人であり、行為の人なのである。学問や知識、また言葉などに対するやり場のない絶望感を抱きながら、それを打ち破ろうともがいている。

「天上の序曲 (PROLOG IM HIMMEL)」で「主」(Der Herr) はファウストのことを「わたしの僕」(Meinen Knecht)(299, S.17) と言っている。そして、ファウストを対象にして「主」とメフィストが賭けをする。メフィストが、ファウストを「主の僕」から引き離し、悪の道に突き落とすということである。「主」は、ファウストがこの地上にいる限りメフィストの意のままにすることを許し、「人間は努力する限り、迷うものだ」(Es irrt der Mensch, solange' er strebt.) (317, S.18) と言う。この「主」の台詞は、先のファウストの人間の精神の「崇高な努力」と符合する。確かに、努力もしないで、やたら迷っている人間も多くいる。メフィストは、ファウストの努力をただ最高のものを求めてあがき、胸の内には、慎むことのできない不満が充満しているのだ、というぐらいに思っているようだ。「主」は、ファウストを念頭において、「良き人間は暗い衝動のうちにあっても、/ 正しい道を知っているものだ」(Ein guter Mensch in seinem dunklen Drange / Ist sich des rechten Weges wohl bewußt.)(S.328-9, S.18) と、メフィストが愚痴を言うのを予言する。もうこの時に、この賭けの勝負はついていたのであろう。このあと「主」は、人間はすぐに怠惰に陥るため、刺激を与えてくれるメフィストのような連中が必要だという。また、悪魔とも人間らしく話してくれるこの「年寄り」(den Alten) にメフィストは好意を抱いている。

先の「契約」の場に戻ろう。

ファウストの望みは、天国に救済されるというようなことではなく、どこまでもこの現世にとどまっている。それは、地上のものに対する欲望であり、官能による悦楽である。この世のはかなさを知るメフィストフェレスは、この契約が自分に利するものであると計算し、しきりに契約を勧めるのである。

FAUST. Werd' ich beruhigt je mich auf ein Faulbett legen,

So sei es gleich um mich getan!

Kannst du mich schmeichelnd je belügen,

Daß ich mir selbst gefallen mag,

Kannst du mich mit Genuß betrügen,

Das sei für mich der letzte Tag!

Die Wette biet' ich!

MEPHISTOPHELES. Topp!

FAUST. Und Schlag auf Schlag!

Werd' ich zum Augenblicke sagen:

Verweile doch! du bist so schön!

Dann magst du mich in Fesseln schlagen,

Dann will ich gern zugrunde gehn!
Dann mag die Totenglocke schallen,
Dann bist du deines Dienstes frei,
Die Uhr mag stehn, der Zeiger fallen,
Es sei die Zeit für mich vorbei! (1692-1706, S.57)

ファウスト. もしおれがいつか、安んじてのらくら暮らすようなら、
そのときにはもう、おれはおしまいだ！
もしおまえが、甘言を弄して、おれをだますことができたなら、
おれはもういいなりになろう、
もしおまえが、享楽をもって、おれを欺けるのなら、
それがおれにとって最後の日だ！
賭けようじゃないか！

メフィストフェレス. よし約束だ！

ファウスト. 手打ちだ！

もしおれがある瞬間にむかって、
「時よ、とまれ！ おまえはじつに美しい！」と言ったら、
そのとき、おまえはおれを鎖でつなぐがよい、
そのとき、おれは喜んで破滅していくつもりだ！
そのとき、死者たちの鐘を鳴り響かせるがよい、
そのとき、おまえは役目から解放される、
時計は止まり、針は落ちる、
おれにとっての時は、もう終わった！

ファウストが、この世にあって、これ以上にはないという充実した至福の瞬間を抱くときに発せられる「時よ、とまれ！ おまえはじつに美しい！」が、この作品の根幹をなす言葉なのである。メフィストフェレスは、官能による歓びによってファウストの努力と向上の意志を削ぎ、刹那の快樂のうちに自己を失わせしめようとするのであり、このあと、メフィストフェレスが従者となって、生の享楽を求める遍歴が続くことになる。それに先立ち、メフィストフェレスは血を垂らした誓詞を求める。血判は洋の東西を問わず、また悪魔の世界でも、誓いを重いものにするようである。

しかし、ここで、ファウストとメフィストフェレスとの間に若干の齟齬があるようだ。あるいは、メフィストフェレスが自己の力を過信しているのかもしれない。確かにファウストは、「官能」(Sinnlichkeit)の中で「燃え立つ情熱」(glühende Leidenschaften)を静めてくれ(1749-50, S.58)と要求するが、メフィストフェレスの思惑とはどこかずれている。

FAUST. Du hörest ja, von Freud' ist nicht die Rede.
Dem Taumel weih' ich mich, dem schmerzlichsten Genuß,
Verliebttem Haß, erquickendem Verdruß.
Mein Busen, der vom Wissensdrang geheilt ist,
Soll keinen Schmerzen künftig sich verschließen,
Und was der ganzen Menschheit zugeteilt ist,
Will ich in meinem innern Selbst genießen,
Mit meinem Geist das Höchste' und Tiefste greifen,
Ihr Wohl und Weh auf meinen Busen häufen,
Und so mein eigen Selbst zu ihrem Selbst erweitern,
Und, wie sie selbst, am End' auch ich zerscheitern. (1765-75, S.58-9)

ファウスト. よく聞いてくれ、喜びなど問題にしていない。
陶酔に身を捧げたいのだ、苦しくてたまらない享樂に、
熱愛する憎しみに、元気づけてくれる不快さに。
抑えがたい知識欲から癒えたおれの胸は、
これからの苦痛に心を閉ざすことなどない、
そして全人類に分け与えられているものを、
おれはおれの内なる自我で味わい尽くしたい、
おれの精神で、最高のものを、最深のものを掴みたい、
人類の幸福と禍をおれの胸に積み重ねたい、
そのようにしておれ自身の自我を人類の自我へと広げていくのだ、
そして、人類と同様、最後にはおれも破滅するつもりだ。

このファウストの壮大な探究心をメフィストフェレスはどのように考えていたのであろうか。ここでファウストが述べている欲求は、人類の精神が、あるいは人間の精神がなすものであって、すでに自己の破滅することを、無に帰するであろうことを、見据えているのである。この世界を見つめ、この世界を消化しきれずに生きている多くの人間を見てきたメフィストフェレスは、ファウストのこの大仰な志向になにも感取するものがない。ただ空想が舞い上がっているぐらいにしか考えていない。そして、ファウストに「小宇宙さん」(Herrn Mikrokosmos)(1802, S.59) という名称を与えている。

FAUST. Was bin ich denn, wenn es nicht möglich ist,
Der Menschheit Krone zu erringen,
Nach der sich alle Sinne dringen?
MEPHISTOPHLES. Du bist am Ende — was du bist,

Setz dir Perücken auf von Millionen Locken,
Setz deinen Fuß auf ellenhohe Socken,
Du bleibst doch immer, was du bist. (1803-09, S.59-60)

ファウスト. あらゆる官能をもって窮めようとして、
人類の王冠を獲得することもできなかつたら、
おれは一体何なのだ？

メフィストフェレス. あなたは結局—あなたご当人なのです。
幾百万の巻き毛のかつらをかぶったところで、
あなたの足に高底の靴を履かせたところで、
あなたはもちろんいつも、あなたご当人のままなのです。

非常に説得力のある言葉である。「自分はなになのか？」という問いを、誰もが口にすることがあろう。おそらく、独り言のようになおも口にしていることであろう。答えを見いだせるかどうか分からないが、この反問がまた、生きていく原動にもなるように思う。このようなことを他人に尋ねたところで、まともな返事を期待することはできない。メフィストフェレスのこの返答をどのように考えるべきなのであろう。「わたしは何か？」と問うているのに、「あなたはあなたでしかない」というのは、返答になっていない。何も言っていないのに、なぜか強い説得力をもっていて、肯いてしまう。このあと、ファウストはメフィストフェレスに言い募ることもなくなった。メフィストフェレスは、ファウストに生の享樂を味合わせしめ、満足感を与えることで、勝算のある賭けだと考えている。

メフィストフェレスとファウストが話している間、高名なファウスト博士を慕い、面談を求め遍歴学生 (Schüler) が外で待っていた。旅に準備にかかるため、退場するファウストだが、その代わりにファウストのガウンを着て、メフィストフェレスが対応する。

この学生は、地上と天空に存在するものを理解すべく、「科学と自然」(1901, S.62) について学びたいという。メフィストフェレスはこの学生に、まずは「論理学」を学ぶことを勧める。次に「形而上学」を勧める。そのあと学生に何を学びたいのかを問うと、この学生は「法律学」だけはいやだと言う。ゲーテも確か、父親とのこともあって、「法律学」を学ばされていた。その経験がこのような台詞になったのかもしれない。それでこの学生は「神学」を学ぶ気になっているという。メフィストフェレスは、それには毒がひそんでいて、悪い道に人間を引き込む、と言う。最後に「医学」はどうかと尋ねられ、もういやになったのであろう、メフィストフェレスは、次のように言う。

MEPHISTOPHELES.

Laut. Der Geist der Medizin ist leicht zu fassen;
Ihr durchstudiert die groß' und kleine Welt,

Um es am Ende gehen zu lassen,
Wie's Gott gefällt.
Vergebens, daß Ihr ringsum wissenschaftlich schweift,
Ein jeder lernt nur, was er lernen kann;
Doch der den Augenblick ergreift,
Das ist der rechte Mann. (2011-18, S.65)

メフィストフェレス.

(大声で) 医学の精神など、すぐに理解できる。
あなたはまず、大世界と小世界を徹底的に研究すべきだ。
それも結局、放置されることになろう、
神の思し召しのように。
あなたが学問のことであれこれと彷徨っても、むだなこと、
誰だって、学びうるものしか学ばないのだ。
だが好機をとらえる男こそ
それが本当の男だ。

メフィストフェレスのいう「小世界」とは、この「人間世界」を指している。「大世界」とは、この作品の二部で示されているような時空を超えた世界で、アレゴリーとして把握しなければならず、そのうちにあってもなお、現存を想起せしめる世界でなければならない。この「大世界」についてはいろいろな解釈がある。そして、それらの世界を徹底的に研究しろと命じるのだが、途中で投げ出されることを予言する。学問に身を捧げることなど、無駄だと思っている。永遠に持続する真理とかいうものを究めようとする学者のなんと多いことか。そのため、できもしないのに、様々な分野の学問に手を伸ばす学者のなんと多いことか。すべてが無に帰すだけで、永続するようなことを信じていないメフィストフェレスは、なにごとかが生起する瞬間、その刹那をうまく掴むことが大切だと考えている。その刹那をうまく活用していくことが真の人間の生き方なのである、と。ならば、何を学ばよいか。それは、「女性の扱い方」(die Weiber zu führen)である。また、女性は称号に弱い。称号だけで信用してしまうので、学位を取ることを勧める。メフィストフェレスは、女性の治療法をエロティックにいろいろと教授する。この学生は、もっと単純なことのようかのように考えていたので、分かったような気持ちにはなっていないが、頭が混乱してしまっている。メフィストフェレスは、この学生に「友よ、すべての理論は灰色で、生命の黄金の木は緑だ」(Grau, teurer Freund, ist alle Theorie, / Und grün des Lebens goldner Baum.)(2038-39, S.66) という。学問、理論の不毛を説き、享楽にだけ心向けさせようとしているのだが、いかに刹那主義だとしても、メフィストフェレスにはとてつもない生命力が息づいている。また、事の善悪などお構いなしなのだ。疲れを知らず、決してめげることのない生命の強さには驚嘆を覚える。

この学生もそれに圧倒されている。差し出した記念帳に「創世記」第三章五節のアダムとイブを誘惑するへビの言葉をメフィストフェレスは記す。その言葉をつぶやき、学生は去る。苦しみがその学生を待っているのだ。

そして、準備が整ったファウストが再び登場し、メフィストフェレスとともに、長い遍歴の途につくのである。

(2021・4・10)

『ファウスト』 雑感 VII
—ホムンクルス—

Notizen über “Faust” 7
—Homunculus—

漆 谷 克 秀
Katsuhide Urushidani

7. ホムンクルス

インターネットで検索すると、「ホムンクルス」(Homunculus)とは、ラテン語で「小人」の意味であり、「ヨーロッパの錬金術師が作り出す人造人間で、作り出す技術のこと」となっている。ルネッサンス期のパラケルスス(Paracelsus)がその生成に成功したとされ、彼の死後、再び成功したものはいなかった、ということである。生成方法も記されているので、興味のある方はお試しく下さい。また、『ブルタニカ百科事典』にあたると、パラケルススは、「スイスの錬金術者、医師」ということで、著書もあり、1493年から1541年まで実在していた。それは、ファウストの時代にも重なっている。当時としては革新的な病理観をもち、「医化学の祖」ともいわれている。この作品の「ファウスト」は、パラケルススがモデルになっているという錬金術研究者もいるが、ファウストとは別に、この作品には「ホムンクルス」の生成に成功する人物が登場する。それは、ファウストの助手であったワグナー(Wagner)である。

第二部第二幕は、もとのファウストのゴシック風の書斎から始まる。書斎は、二人が「契約」をして出奔したときのそのままであった。第一幕の最後で、仮象のパリに鍵で触れ、爆発を起こしたときに気を失ったファウストが、カーテンを通して古風なベッドに横になって眠っているのが見える。どれだけの時間が経過したのであろうか。相当な年月が経っているのは確かだ。出奔する直前にファウストを尋ねてきた遍歴学生は、「女性の扱い方」を学ぶようにというメフィストフェレスの助言に背き、一応の課程を修了した「学士」(Baccalaureus)として登場し、学問の現状を批判糾弾する先鋒となっている。わたしは「団塊の世代」であり、大学時代の二年間は、学園紛争のさなかにあった。この学士様が主張する、既成のものをすべて批判の嵐に巻き込み、破壊しようとする弁舌には、学生時代の記憶を彷彿させるものがある。機会があれば、そのことにも触れてみたい。

ワグナーは、ひとり実験室に籠もり、ホムンクルスの生成に専念している。ト書きによると、突拍子もない(phantastisch)な目的のためにでかい役に立ちそうもない機器などが備え付けられた中世風の造りをした実験室で、人造人間の生成にいそしんでいる。前の場で、「研究助手」(Famulus)は、ワグナーが火を使っている、顔はすすけ、眼は赤くなり、火ばさみのガチャガチャという音が音楽のように響いてくる、と言っている。

まさにその瞬間が訪れようとしている。

WAGNER am Herde.

Schon in der innersten Phiolen

Erglüht es wie lebendige Kohle,

Ja wie der herrlichste Karfunkel,

Verstrahlend Blitze durch das Dunkel.

Ein helles weißes Licht erscheint!

O daß ich's diesmal nicht verliere! — (6824-29, S.209)

ワグナー (炉端で).

もうフラスコの中心には
生き生きと燃え上がる石炭のように、
そう みごとなルビーのように、
闇の中に稲妻を走らせて 燃えて輝く。
明るい白い光が現われた！
今度こそ失敗はしないぞ！—

人造人間の誕生する、まさに極度に緊張する瞬間を迎えている。今まで幾度か失敗したことがあるのであろう。今度こそ、と張りつめた空気のなか、メフィストフェレスは、騒がしく戸をガタガタさせて登場する。そんなメフィストにワグナーは、声をひそめ、息を殺すように要請し、「素晴らしい仕事がすぐに成就する」(Ein herrlich Werk ist gleich zustand gebracht) (6834, S.209) という。

MEPHISTOPHELES leiser.

Was gibt es denn?

WAGNER leiser. Es wird ein Mensch gemacht.

MEPHISTOPHELES. Ein Mensch? Und welch verliebtes Paar

Habt ihr ins Rauchloch eingeschlossen? (6835-37, S.209-10)

メフィストフェレス (声をひそめて).

いったい何ごとなんです？

ワグナー (さらに声をひそめて) 人間ができるのだ。

メフィストフェレス. 人間が？ じゃ、惚れ込んだカップルを
この煤けた穴の中に閉じ込めたんで？

メフィストフェレスの驚愕にも似た、この滑稽な問いかけは、あながち的の外れたものでもないであろう。最初の「試験管ベビー」のルイーザ・ブラウン(仮名)が15歳の時にテレビの番組に出演した。(1993年秋)人と違った出生のことでこれまで同級生からからかわれたことがあるかと尋ねられて、「友達は私をからかおうとして、こんなふう聞くの。『どうやって試験管に入れたの?』」と答えている。(上村芳郎『クローン人間の倫理』、みすず書房、2003年、47~8ページ) 現在では許されない質問であろう。単にからかいだけではない、やはり、拭いきれないような不思議な思いがあるようだ。

ワグナーは、「とんでもない」といって、将来の生殖の高尚なあり方をメフィストフェレスに説明するのである。今の生殖は「むなしい茶番」(eitel Possen) だとして、品位もあつたものではない交接だ、とそのやり方を解説する。五行ほどの解説なのだが、笑ってしまう。

そのあと、高尚な出生が、実験装置を前にして語られ、ホムンクルスが誕生する。

WAGNER.

Zum Herd gewendet

Es leuchtet! seht! — Nun läßt sich wirklich hoffen,
Daß, wenn wir aus viel hundert Stoffen
Durch Mischung — denn auf Mischung kommt es an —
Den Menschenstoff gemächlich komponieren,
In einen Kolben verlutieren
Und ihn gehörig kohobieren,
So ist das Werk im stillen abgetan.

Zum Herd gewendet

Es wird! die Masse regt sich klarer!
Die Überzeugung wahrer, wahrer:
Was man an der Natur Geheimnisvolles pries,
Das wagen wir verständig zu probieren,
Und was sie sonst organisieren ließ,
Das lassen wir kristallisieren. (6848-6860, S.210)

ワグナー.

(炉に向かう)

光っている！ ごらんなさい！—これで期待できそうだ、
幾百もの物質を調合して
—この調合こそ重要なのです—
人間の物質をゆっくりと組み立て、
フラスコの中に密封し、
それをほどよく蒸留する、
そうすると、その仕事はおのずと出来上がっている。

(炉に向かう)

できてきた！ 塊がよりはっきりと動きだす。
信じていたことがますます現実のものになる。
自然にあつて謎に満ちていると賛美したものを
我々は思慮深く、思い切って実地に検証し、
これまで自然が有機的に組織化していたもの、
それを結晶にする。

幾百もの原材料を調合して、人間になる物質を組み立てていく。それをフラスコに密封して蒸留すると、結晶化し、化学的にホムンクルスが生成されるということである。どのような物質を配合して、どのように人間を作るのかは、記されていない。ワグナーは、自然の中の有機的に組織化された物質と言っているが、ゲーテといえど知る由もないのであろう。この高尚な方法に「誕生」という感慨を抱くであろうか。わたし個人としては、従来のあり方を好む。さて、誕生の瞬間はどのようなものであろう。

WAGNER.

Entzückt die Phiole betrachtend.

Das Glas erklingt von lieblicher Gewalt,

Es trübt, es klärt sich; also muß es werden!

Ich seh' in zierlicher Gestalt

Ein artig Männlein sich gebärden.

Was wollen wir, was will die Welt nun mehr?

Denn das Geheimnis liegt am Tage.

Gebt diesem Laute nur Gehör,

Er wird zur Stimme, wird zur Sprache.

HOMUNCULUS in der Phiole zu Wagner.

Nun Väterchen! wie geht's? es war kein Scherz.

Komm, drücke mich recht zärtlich an dein Herz!

Doch nicht zu fest, damit das Glas nicht springe.

Das ist die Eigenschaft der Dinge:

Natürlichem genügt das Weltall kaum,

Was künstlich ist, verlangt geschlossnen Raum. (6871-84, S.210-11)

ワグナー.

(うっとりとしてフラスコを観察しながら)

ガラスが愛らしい力で鳴り響く、

濁ってきて、澄んでくる。そう、できるのだ!

かわいい姿をして、行儀良さそうに小人が

体を動かしているのが、見える。

われわれはなにを望もう、世界はこれ以上になにを望むのだ?

神秘は白日の下にさらされた。

この音に耳を貸そう、

声になる、言葉になってくる。

ホムンクルス (フラスコの中からワグナーに).

やあ、お父さん！ ご機嫌いかが？ 冗談ではなかったんだ。
さあ、ぼくをあなたの胸に、そっと抱きしめて！
でもきつくしないで、ガラスが割れないようにね。
ものの特性でね、
自然のものは、この宇宙でも十分ともいえないが、
人工のものには、閉ざされた空間が必要なのです。

まず、驚かされるのは、ホムンクルスの最初の言葉である。誕生の第一声、それは産声の
はずなのだが、それにしても、ホムンクルスは第一声で「お父さん、ご機嫌いかが？」と呼
びかけており、この唐突な意外な挨拶に笑ってしまう。ホムンクルスは、科学的な方法、学
問的な方法でもって結晶化された存在であり、純粋な人間精神そのものなのである。認識と
か知識とか、学問的な方法で生成されたホムンクルスは、教えられずともあらゆることを知っ
ている。しかし、一応、存在することになったとしても、フラスコの中での揺らぐ姿でしか
なく、実体としての肉体をもたない。そのため、ホムンクルスは、肉体を得て、出来上がる
ことを望んでいる。生まれたばかりであるから、年齢0歳ということなのだが、はたして年齢
を重ねるような存在であるのか、疑問が起こる。

このホムンクルスに、いろいろな象徴的な意味が付与されている。ゲーテの自然哲学から
生まれ、その成立には錬金術に負うところが多い。また、その意味づけにはギリシャ神話に
依ることとなる。

ここでホムンクルスは、「人工のものには、閉ざされた空間が必要なのです」と気になる
ことをいっている。まるで、科学に警鐘を鳴らしているようにも思えるのである。自然の撰
理の中に誕生し、そのまま存在しているものならば、それはそのまま、何ら不都合なこと
はないであろう。しかし、人間は自然の材料から多くの「もの」を作ってきた。それらは、
自然の中で有機的に生成され、やがて死滅していく、そのような存在ばかりではない。その
ようなものに取り囲まれているのが、現代の生活であろう。便利であり、有用な事柄でもあ
るのだが、一定の条件下におかなければならない、あるいは、一定の約定の上で、管理され
ねばならない「もの」が多い。つまり、閉ざされた空間がなければ、われわれの生活を、生
命さえも脅かすものにもなる。製造された生命体であるホムンクルスも、そのようなもので
あろうか。しかし、ホムンクルスは、肉体を得て、自然の有機体として再生されることを願っ
ている。ここではまず、「魂」(Seele)と「肉体」(Leib)の相克が提起されよう。この両者
は分かちがたく結び合っているのに、日常を厭わしいものにしてしまうと、ワグナーが言う
と、メフィストフェレスは、「男と女の関係のようなものだ」と言って、訳がわからなくして
いる。「魂」のことなど考えたくもないのであろうか。少なくとも、われわれが日常的に向き合
っているアンチノミーの問題が、ホムンクルスに示されているのである。

できあがることを願うホムンクルスは、その透視力で、眠っているファウストの夢に、肉
体のあるヘレナを獲得するため古代ギリシャに行く憧れを見抜く。美しい女性レダと白鳥に

変身したゼウスとのゆかしい情交の場を、ファウストは夢に見ているのだ。それがヘレナの出生につながる。ホムンクルスは、眠っているファウストを憧れている古代ギリシャに連れて行くことが覚醒する手段になるだろうとメフィストに提案する。異教徒の世界の行くことを躊躇う北方の悪魔メフィストに「テッサリアの魔女たち」(6977-8, S.214)のことを言って誘うのである。そして、騎士の様相のファウストをマントにのせて、ホムンクルスが先に立ち、照らしながら古代ギリシャに導いていくということになる。

愛しげにホムンクルスを見つめていたワグナーは、この二人の会話には入れず、ひとり取り残されたままで、別れを察していたのであろう。

WAGNER ängstlich. Und ich?

HOMUNCULUS.

Eh nun,

Du bleibst zu Hause, Wichtigstes zu tun.
Entfalte du die alten Pergamente,
Nach Vorschrift sammle Lebens Elemente
Und füge sie mit Vorsicht eins ans andre.
Das **Was** bedenke, mehr bedenke **Wie**.
Indessen ich ein Stückchen Welt durchwandre,
Entdeck' ich wohl das Tüpfchen auf das i.
Dann ist der große Zweck erreicht;
Solch einen Lohn verdient ein solches Streben:
Gold, Ehre, Ruhm, gesundes langes Leben,
Und Wissenschaft und Tugend — auch vielleicht.
Leb wohl!

WAGNER betrübt. Leb wohl! Das drückt das Herz mir nieder.

Ich fürchte schon, ich seh' dich niemals wieder.

MEPHISTOPHELES. Nun zum Peneios frisch hinab!

Herr Vetter ist nicht zu verachten.

Ad spectatores. Am Ende hängen wir doch ab

Von Kreaturen, die wir machten. (6987-7004 , S.214)

ワグナー (不安げに). それで、わたしは?

ホムンクルス.

そうだなあ、

あなたはここに残って、一番大切なことをしてください。

古びた羊皮紙をひもといて、

その指示に従って生命の要素を集め、

それらを注意深く一つひとつ適合させてください。

何ををよく考えてください、いかにをもっともっと考えてください。

その間にぼくは少しばかり世界を巡ってきます。

ぼくはきっと、最後の仕上げの一点を見つけてきます。

そうならば大きな目的が達成されたことになります。

これほどの努力にはそれだけの報酬が得られるものです。

黄金、荣誉、名声、健やかな長寿。

そして、学問と徳を一もしかしたらこれらも。

お元気で！

ワグナー（悲しげに）. 元気でな！ わしの心も滅入ってしまう。

もう二度とお前に会えないかと案じている。

メフィストフェレス. さあ、グズグズせずにペネイオス河に向かおう！

あの縁者さんも捨てたものじゃない。

(観客に向かって) 結局、おれたちも自分たちで作った

ものに引き回されている。

ワグナーに対するホムンクルスの対応は、どのように考えられるのであろう。ワグナーは、一応、ホムンクルスの生みの親であり、ホムンクルスも「お父さん」と呼びかけている。しかし、その態度には一片の親愛の情さえも感じられない。命令法が連なっており、つまり命令をしており、ましてや、「何を」より「いかに」を考えるようにと忠告までしている。それは完成し切れていないことへの嫌みでもあろうし、皮肉も込めているのであろう。ここには「題材」と「方法」との問題が見出せるし、結果ばかりを見据えている現代の科学への警鐘を鳴らしているようにも思える。また、ワグナーを功利的な人間のように見ているようだ。学問の成就（こんなことがありうるであろうか？）や学問における倫理よりも、それによってもたらせられる利得や功名に眼が行っている、と。まるで嫌みのように「学問と徳一もしかしたらこれらも」と付け加えたように言う。ワグナーは、決別になることを予感して気を重くしているのに、これがワグナーへのホムンクルスの最後の言葉である。子どもが親を見限っているようにさえ思える。このあとワグナーは登場することはない。

メフィストフェレスは、ホムンクルスを‘Vetter’と呼ぶ。「従兄弟」を示すのだが、どのように訳すべきなのか。ただ言えるのは、親近性、血縁性を認めている言葉である。そして、観客に向かって言う台詞には、おそらく多くの方々が身につまされていることであろう。わたしも、携帯なんかいらぬ、パソコンもいやだ、と思いながら、勝手に入ってくる暴力的ともいえる宣伝メールをせっせと削除している毎日なのである。

ホムンクルスは人造人間である。フランケンシュタインなど、それは空想上の産物で、果たしてこのようなことができるのか、と思っていたが、1996年に、哺乳類ではじめて、クローン羊が誕生した。2002年4月には、イタリアの不妊治療の専門医師が、クローン処理をして懐妊した女性がいることを公表したのである。2003年には、クローン処理で誕生した人

間が、世界のどこかに存在していることになり、世界中に衝撃が走った。この稿を起こすとき、近くの市立図書館で「クローン人間」に関する本を二冊借りた。（二冊しかなかった！）二冊とも 2003 年の出版であり、反響の大きさが想像できる。筆者（わたし）は、「クローン」について正確に、また十分に理解しているとはいえないが、思うところを少し記述させていただく。

「クローン技術」とは、細胞から、あるいは個体から無性的に細胞を増加させる技術で、植物では、園芸の挿し木や接ぎ木などもクローン技術だという。例えば、赤い花をつけるバラの木に、黄色い花をつけるバラの木を接ぎ木すると、その接ぎ木には黄色い花が咲く。遺伝的にもっている同一の個体を作り出す。それが動物に応用され、そして、人間に進んできたわけである。それで、人間の場合、「コピー人間」などといわれる。また、「体外受精」もクローン技術のひとつである。体細胞化が不完全なこともおおく、成功率はまだ低いのだが、2002 年の時点で一応、この「クローン技術」が人間に応用することが可能になったということになる。しかし、「生命」という神の領域まで侵そうとする「クローン人間」に世界中から反対の声が起り、その「倫理」が問われることになっていった。

それから 20 年近い年月が経っている。この技術はどこまで進化したのであろう。不妊治療や臓器移植、再生治療などの医療分野で、また、食糧増産に資する遺伝子操作など、「遺伝子」とか「ゲノム」とか、また、「分析」とか「解読」、「組み替え」とか「刷り込み」とか、日常の中でよく耳にする状況にもなっている。栄養食品なども多く、その技術に依っているところもある。何も知らないままに、一般の人間であるわたしたちも、その恩恵を受けているのである。さらなる技術革新、効率化がなされ、知らずのうちに利用する人間が増えていけば、わたしたちの感覚は鈍り、このような生命に対する人為的な操作にも不自然とは思わなくなってしまう。また、恐ろしいのはくすぶっている「優生」という思想が姿を現し、人びとの間で憎悪が新たに刷り込まれていくことである。狭窄な視野で生命を観ることに、歴史上、良いことなどひとつもなかった。また、73 歳のわたしの細胞からコピーして「クローン人間」を造るとすると、その人の年齢はいくつなのか？ 遺伝子が受け継がれるということであるが、腰痛に苦しみ、腕を上げると肩に痛みが走る、そんなことも受け継がれるのであろうか？

急速に進展する科学技術の分野で、「クローン技術」とその周辺技術も特別視されなくなってきた。不妊治療にあっても、日本では今、高額なその費用をどうするかが問題となっているだけである。今後、「クローン人間」以上に「倫理」性を問われる科学技術上の出来事が起こるのは必定であろう。あまり考えたくもないことであるが、予測もされているのであろう。

「ホムンクルス」に戻ろう。

次の第二幕第二場は「古典的ワルプルギスの夜」（KLASSISCHE WALPURGISNACHT）である。ドイツ中央部にあるハルツ山中のブロッケン山に 4 月 30 日の夜、魔女たちが集まっ

て卑猥な宴会が繰りひろげられる第一部の「ワルプルギスの夜」と照応している。場所は「古典的ギリシャ」であるが、オリンポス十二神が縦横に活動した時代は過ぎ去り、一段下の後継者たちがその祝祭を催しているということになる。「ワルプルギス」という北方の聖女の名が付されているので、パロディーということにもなろう。しかしそれは、月の女神ルーナ (Luna) を知らし召す祝祭であり、南国の明るさと吹く風に若木若葉の匂いの爽やかさがある。夜の祝祭が頂点に達すると、ジレーネたち (Sirenen) ネイレスの娘たち (Nereiden) やドリスの娘たち (Doriden) の漂うなかをヴィーナス (Venus) の貝の車に乗ったガラテア (Galatea) が、エロスの女神として波の上を練り行き、エロスの礼讃で終わるのである。本来なら、ヴィーナスが演ずるはずの役割をガラテアが演じている。古代の神々はもう姿を消しており、その終焉を迎えている。

登場人物(?)は、あらゆる半神たちであり、ギリシャ神話の人物や伝説上の怪物、そして妖怪たちと、多種多様をきわめている。また、ギリシャ哲学を代表して、万物の根源を水に求め、水の恵みをたたえる水成論者のタレス (Thales) や、地球内部の火の力を重視し、噴火の作用を強調する火成論者のアナクサゴラス (Anaxagoras) が論争を繰り広げる。そのような変幻きわまりない様相を呈している。

まず、「ファルザルスの戦場」(PHARSALISCHE FELDER) の場である。暗闇のなか、導入者として、テッサリアの魔女のひとり、血を好む「エリヒトー」(Erichito) が登場する。この地でローマ時代 (BC47年) にポンペイウスとカエサルとの戦さがあり、多くの血が流され、その血が染みついていることなど、このテッサリアの地のことを紹介する。また、篝火がともされたなか、魔性のものたちが集まってくるのを見つめていると、そこに流星のように、ホムンクルスに先導されて、メフィストフェレスとファウストが降りてくるのを認め、それを報告する。

彼らが大地に触れるやいなや、ファウストは目覚め、真っ先に口に出た言葉が「彼女 (ヘレナ) はどこだ?」(Wo ist sie?) (7055, S.216) である。また二言目も「彼女はどこだ?」であり、ファウストの頭は「ヘレナ」のことで占められている。この祝祭でホムンクルスもファウストもメフィストフェレスも、求めているものが違っている。この三人(?)は、この篝火のなか、結局、別々の行動をとることになる。本稿では、ヘレナを求めてその足跡を追うファウストと「形姿」を得て完成することを求めるホムンクルスについて述べていきたい。多種多様な半神や妖怪が登場するのではあるが、関連するものだけを見ていきたい。留意しておきたいのは、この場は、時間、空間を超えており、登場する半神や妖怪も仮象として考えておくのがよい。なによりも、じつに素晴らしいゲーテの創作なのである。

ファウストは先ず、ペネイオス河の上流に行く。そこにいるスフィンクスたちにヘレナのことを尋ねる。

FAUST zu den Sphinxen.

Ihr Frauenbilder müßt mir Rede stehn;

Hat eins der Euren Helena gesehn?
SPHINXE. Wir reichen nicht hinauf zu ihren Tagen,
Die letztesten hat Herkules erschlagen.
Von Chiron könntest du's erfragen;
Der sprengt herum in dieser Geisternacht;
Wenn er dir steht, so hast du's weit gebracht. (7195-7201, S.220)

ファウスト (スフィンクスたちに).
あなたたちご婦人方、教えてもらいたいのだが、
あなたたちの誰か、ヘレナを見たものはいないですか？
スフィンクス. わたしたち、彼女がいた頃にはもういなかったのです。
末裔のものたちをヘーラクレスが打ち殺しました。
ケイローンさんにお尋ねになられては。
あの方、この亡霊の祭りの夜をあちこち駆け回っています。
あの方があなたの前で立ち止まるのなら、しめたものです。

このスフィンクスたちはヘレナよりも以前の存在で、自分たちが滅亡した後に、ヘレナの時代になっていると告げる。ギリシャ神話の最大の英雄であるヘーラクレスは多くの人神や半神を退けているが、『ギリシャ・ローマ神話辞典』（高津春繁、岩波書店）によっても、ライオン退治あるのだが、スフィンクスを退けた記載はない。少し艶めかしく女性化され、水辺の寄り添うスフィンクスたちは、ギリシャ化されたゲーテの創作であろう。そのスフィンクスが、ケイローンに尋ねてみるようにファウストに言う。馬身で腰から上が人間の姿になっているケンタウロス族の一人、非常に賢明で、音楽、医術、狩、運動競技、予言の術にすぐれ、多くの英雄たちがケイローンに養育されたといわれる。

次の場は「ペネイオス川の下流」(AM UNTERN PENEIOS) である。ここでファウストは疾駆するケイローンに会い、運良くその背中に乗せてもらう。ファウストに誘導されて、ケイローンは思い出話をする。そのときに、十歳の若いヘレナに乗せたことを話す。それがまたファウストを夢中にさせる。しかし結局、話だけであって、この地にもヘレナの姿を見いだすことができない。ケイローンはファウストを予言者で女医者であるマントー(Manto) のところに連れて行き、恋患いの治療を頼むのである。

CHIRON.
Helenen, mit verrückten Sinnen,
Helenen will er sich gewinnen
Und weiß nicht, wie und wo beginnen;
Asklepischer Kur vor andern wert.

MANTO. Den lieb' ich, der Unmögliches begehrt.

Chiron ist schon weit weg.

MANTO. Tritt ein, Verwegner, sollst dich freuen!

Der dunkle Gang führt zu Persephoneien.

In des Olympus hohlem Fuß

Lauscht sie geheim verbotnem Gruß.

Hier hab' ich einst den Orpheus eingeschwärzt;

Benutz es besser! frisch! beherzt!

Sie steigen hinab. (7484-94, S.228)

ケイローン.

ヘレナを、狂おしい思いで、

ヘレナを彼は自分のものにしたいと望んでいる、

どこでどう始めれば、も分からずに。

アスクレピオスの治療がなによりも良さそうだ。

マントー. 出来ないことを求める人って、好きですよ。

(ケイローンは遠くに去っている)

マントー. お入りなさい、向こう見ずな方、喜んでいいことよ。

この暗い通路は冥府の女王ペルセポネーに通じています。

オリンポス山の底の洞窟の中で、

彼女はひそやかに禁じられた挨拶に耳をすませています。

以前ここから、オルフォイスを潜り込ませたのよ。

うまくやるのよ！ 元気を出して！ 勇気を持って！

(二人は降りていく)

ここでファウストは「古典的ワルプルギスの夜」の場から消える。そして、第三幕の冒頭のところに、ヘレナが登場しているのである。この空白が問題にはなっていたが、ゲーテはそれを意に介さなかった。1827年1月15日のエッカーマンとの対話では、冥府の女王ペルセポネーの冷たい心を動かして、ヘレナをもらい受ける台詞を考えていたのだが、容易ではなかったこと、結局、その台詞は書かれなかったことが語られている。ここでは、ヘレナへの道が示されているだけではあるが、オルフォイスの名前が出ていること、「うまくやるのよ！」というマントーの台詞から、「うまくやった」その後のことを想像するだけである。第二部は、最初に第三幕が書かれており、後から書かれた第二幕には、第三幕に円滑につなげていく多大な努力が払われたことは想像できる。しかし、第三幕とのつながりに疑問が起るのも必然であろう。

ホムンクルスは、どうしたのであろう。

まだペネイオス河の上流にあって、ガラスの容器を打ち砕き、最高の状態で出来上がりたいと願って、二人の哲学者の後を追っている。この二人の議論から「自然！自然！」(Natur, Natur!) (7837, S.238) という声が聞えてくるからである。その二人が、アナクサゴラス (Anaxagoras) とターレス (Thales) である。二人が議論している中から、よい「助言」を得ようと、ホムンクルスは彼らについていく。火による急激な自然の変容と水の静かな自然の生成との議論である。ホムンクルスはターレスに誘われて、「楽しい海の祝祭に」(zum heiter Meerfest) (7949, S.241) 行くことになる。

次の場は、「エーゲ海の岩場の入り江」(FELSENBUCHTEN DES ÄGÄISCHEN MEERS) である。ターレスは、最初、海神で海の老人、賢明、温和で予言の力がある（頑固で、気むずかし屋でもある）というネーレウス (Nereus) に相談しようとしたのだが、ネーレウスはその気になってはいなかった。次に、ポセイドン（ネプドウーヌス）の従者といわれているプローテウスに相談しようとする。好奇心の強いプローテウスは、身体をあらゆるものに変える力を有しており、彼から予言を得ようとするのなら、捕まえて離さないでいると、本来の姿に戻り、未来を教えるということである。しかし、なかなか捕まらないようだ。

THALES. Gestalt zu wechseln, bleibt noch deine Lust.

Hat den Homunculus enthüllt.

PROTEUS erstaunt.

Ein leuchtend Zwerglein! Niemals noch gesehn!

THALES. Es fragt um Rat und möchte gern entstehn.

Er ist, wie ich von ihm vernommen,

Gar wundersam nur halb zur Welt gekommen.

Ihm fehlt es nicht an geistigen Eigenschaften,

Doch gar zu sehr am greiflich Tüchtighaften.

Bis jetzt gibt ihm das Glas allein Gewicht,

Doch wär' er gern zunächst verkörperlicht.

PROTEUS. Du bist ein wahrer Jungfernsohn,

Eh' du sein solltest, bist du schon!

THALES leise.

Auch scheint es mir von anderer Seite kritisch:

Er ist, mich dünkt, hermaphroditisch. (8244-54, S.249-50)

ターレス. 姿を変えること、いつもながら楽しんでいるようだな。

(ホムンクルスの覆いをとる)

プローテウス. (驚いて)

光っているおチビちゃんだ！ 今まで見たこともない！

ターレス． 助言を求めている、生まれ出たいのだ。

この子から聞いたことだが、この子は
奇妙なことに半分しか生まれ出ていない。
精神のことでは、欠けたものはない、
だが、なにかが出来るはっきりとした能力がまったくない。
今までのところガラスだけがこの子に重みを与えている。
だから、なによりも身体がほしいのだ。

プロテウス． 君は本当の処女の息子だ、
君は存在する以前に、既に存在している！

ターレス（小声で）．

また他の面でも問題があるように見える。
この子は両性具有に思える。

ホムンクルスは、なんとかして心身ともに具えた存在に生まれ出たいと思っている。科学的に合成されて出来たので、知識や認識、悟性など、精神的な事象については既にできあがっている。このことについて、アリストテレスの「質量形相論」が引き合いに出されることもある。質量（マテリア、hyle, Materie）が、形相（エイドス、eidos, Form）を実現して、実存在を完成するとして、その状態をエンテレケイア（entelecheia、ギリシャ語）といわれている。しかし、このことも概念上のことである。エミール・シュタイガーはホムンクルスのことを、「具体的に表現しようとしても本質的に表現不可能なもの、それ自体として決して存在せず、眼で見ることでも耳で聞くこともできず、唯一思考によってのみ、人為的に切り離すことができるもの」といっている。また、エッカーマンによると、「ゲーテは、それ（ホムンクルス）によって、純粋なエンテレヒーを、悟性を、あらゆる経験に先立って現われる人間の精神を描き出そうとしたのだ」と述べ、「なぜならば、人間の精神は生まれてくるときにすでに極めて豊かな才能に恵まれているからであり、何ごとにしる、われわれは決して学んで得たわけではなく、持って生まれてきたからである」といっている。思考でもって理解できても、表現できなくて苦しむことはよくあるし、生まれながらにして持つ才能にも納得する。学習や経験に先立つ生得の才能を認められるのは、天才ゲーテであるからか。

ホムンクルスが何を示すアレゴリーなのか、ということは触れず、精神の存在で、身体を、つまり「形相」を求めていることに留意したい。また、「両性具有」ということも、これから生成されていく途上にあるものとして考えてみる。

永遠の法則に従い、急がずに時間をかけて、幾千もの形態を経て人間になるように、とターレスは助言する。しかし、心身ともに具えた「人間」として早く「できあがりた」と願うホムンクルスを、^{イルカ}海豚になった海神プロテウスは背中に乗せて大海へと連れ出し、ターレスも共に行くのである。

ガラテアの貝殻の車が近づき、そして海原の彼方へと去って行く。しかし、遠くに行つて

もガラテアの玉座は明るく輝いている。

HOMUNCULUS. In dieser holden Feuchte

Was ich auch hier beleuchte,

Ist alles reizend schön.

PROTEUS. In dieser Lebensfeuchte

Erglänzt erst deine Leuchte

Mit herrlichem Getön.

NEREUS. Welch neues Geheimnis in Mitte der Scharen

Will unseren Augen sich offengebaren?

Was flammt um die Muschel, um Galatees Füße?

Bald lodert es mächtig, bald lieblich, bald süße,

Als war' es von Pulsen der Liebe gerührt.

THALES. Homunculus ist es, von Proteus verführt . . .

Es sind die Symptome des herrischen Sehnsens,

Mir ahnet das Ächzen beängsteten Dröhnens;

Er wird sich zerschellen am glänzenden Thron;

Jetzt flammt es, nun blitzt es, ergießet sich schon. (8458-73, S.255-6)

ホムンクルス. この快い湿りのなかで、

ここにぼくが照らしだすものは、

すべてがうっとりするほど美しい。

プロテウス. この生命を育む湿りのなかで、

はじめておまえの光が輝くのだ。

壮麗な響きとともに。

ネーレウス. あの群れのただなかでどのような新しい神秘が

おれたちの目の前で明かされようとしているのか？

あの貝殻を取りまいて、ガラテアの足下で、何が燃え上がるのか？

激しく炎をたて、ときの愛らしく、ときに甘く、

愛の鼓動に触れているかのように。

ターレス. あれはホムンクルスだ、プロテウスに誘われて。

抑えられない憧れのしるしです、

不安にかられたどよめきの呻きを感じとれる。

輝く玉座に触れて、砕けてしまうのか。

ああ、燃えあがった、光った、もう海にあふれ出ている。

命を生み出す慈しみの水に光を与えているホムンクルスは、その映し出された光景に、恍惚としている。灯りを照らしながら、ひとり離れて、ガラテアを追いかけていく。それを、ターレスやプロテーウス、ネーレウスが、ライブ放送のように語るのである。海に湿り（水）のなかで、ホムンクルスの燃えあがる炎（火）。それは、愛の鼓動にも似て、ホムンクルスの心を激しく震え動かしているのだ。憧れの果てに、ガラテアの貝の玉座に触れてフラスコが砕けてしまう。ホムンクルスの燃えあがる生命は海へとあふれ出て、一時、すべてを炎で包むのであろう。そのようにして、すべての生命を育む愛の神エロスのもとに帰って行く。そしてそれが、新たな生成の始まりなのである。登場した全員が、生命の根源としての「四大」を賛美し、それを朗唱して、この二幕は、幕を下ろす。

ALL-ALLE! Heil den mildgewogenen Lüften!

Heil geheimnisreichen Grüften!

Hochgefeiert seid allhier,

Element' ihr alle vier! (8484-87, S.256)

全 - 全員！ 穏やかに波立ち揺らす風を讃えよう！

神秘に満ちた地の底を讃えよう！

ここにあるすべてを誉め称えよ！

根源の力、おまえたち四大を！

メフィストフェレスはどうしたのであろう。古典ギリシャにおいて、どうも勝手が違っており、誰からも相手にされず、愚痴ばかり言っていた。洞窟の中の暗がり、しゃがみこんでいる三人で一人の娘たちを見つける。古典ギリシャにおいて、最も醜悪極まる妖怪フォルキアスの娘たち（Die Phorkyaden）であった。闇に生まれ、混沌のなか闇のものとして生きている者同士で、すぐに昵懇の間柄になった。そして、メフィストフェレスは、彼女たちから三番目の姿を借りるのである。（S. 241-3）

第三幕では、「美」の典型であるヘレナとともに、「醜」の典型として侍女役で登場する。

(2021.9.12)